

平成24年度「わたしの主張」宮古地区大会 優秀賞

「未来に続く海」 3年 山本 拓実

『おいしい料理を作って、みんなを良い気分させよう。』調理師になる。それが僕の小さい頃の夢でした。中一の冬の三者面談も、担任の先生に「調理師になるので、食物科にいきます。」と言いました。母は「まあ、拓実にはむいているか。」と賛成し、父も賛成してくれていましたが、おまけの言葉がついていました。おまけの言葉とは「どこの高校に行ってもいいけど、潜りの資格だけは絶対に取れ。」、僕の父は潜水士です。震災前は田老の海にもぐり、あわびやうになどの漁をしていました。そんな父のおまけの言葉を聞く僕は、軽い返事で「はい、はい。」と言い、心の中で「まあ、取ればいいんでしょ。」と簡単に考えていました。

そんな僕の今までの考えが大きく変わったのは、昨年三月十一日の震災後です。僕の生活も大きく変わり、我が家も避難所生活が始まりました。テレビでは連日、行方不明者を捜索する映像が流れています。その中の一場面が、僕の頭の中から離れませんでした。潜水士の方が行方不明者の方を捜索するものでした。潜るイコール魚業だけではないことを改めて感じたのです。この時以来、僕は潜水士の仕事が気になり始めました。

そんな頃父は、田老の海に潜り養殖の準備をしていました。家に帰って来た父が「拓実、拓実が小学生の頃、俺と一緒にうにの口開けに行ったよな。その時箱めがねで見た海の景色とは全然違うぞ。」と言いました。「ああ、自分の目で見るとどう感じるんだろう。」ますます潜水士の仕事が気になりました。父はその後、家族を守り生活していくために宮城県女川に単身、働きに行きました。僕はどうしても父の仕事場が見たくて、六時間かけて女川に行きました。女川も田老と同じで何も無く、父も秋田から来ている人と二人でプレハブに住んでいました。会社の方々も良い方たちで、とても安心して帰ってきました。

そんなある日、進路通信で種市高校の体験入学を知りました。「行ってみようかな。」父に相談してみると「行くだけ行って来い。」と言われ、僕はいとこを誘っていくことになりました。体験遊学では、潜りの体験をしました。いざ潜ってみると、苦しいのと怖いので早くやめたくまりました。一緒に行きたいところは僕とは正反対で、どんどん潜りとても楽しそうでした。悔しくて、できない自分に腹がたちました。その日の夜に父に電話すると、「お前には潜りの素質がないんじゃない。」と笑われました。自分でもそう思いましたが、どうしても納得いきません。もう一回やっただめだったらあきらめよう。リベンジの一般向けの講習会、いとこの支えもあり十メートルまで潜ることができました。十メートルから見上げる水面はなんとも言えない景色でした。

講習会から帰り、「潜水士になろうかな。」と母にうちあげた時、母は祖父の話を始めました。祖父は撰待の海で生きる漁師だったこと。漁に出て亡くなったこと。その時母が小学生だったこと。そして、祖父の遺体を潜水士の方が見つけてくださったこと。今でも母と祖母は潜水士の方に感謝していること。僕には始めて聞くことばかり……。でも、僕の中で何かがつながりました。

母から聞いた祖父のこと、仕事をしている父のこと、今、僕は父のような潜水士になりたいと強く思います。そして、いつか父と一緒に潜水士として田老の海で働きたいとします。じいちゃんが生きた海で、父さんと一緒に漁をする。復興のために何かする。僕の未来も海へと続く。